

副詞「せいぜい」「たかだか」「たかが」の意味と用法

A Semantic Analysis of *Seizei, Takadaka, Takaga*

Rieko Nakato

仲渡理恵子

要 旨

副詞「せいぜい」「たかだか」「たかが」は、さまざまな観点から研究されているものの、意味の相違や使い分けなどが明確にされているとはいえない。本稿は、日本語書き言葉コーパスから、各々 100 用例を抽出し、文型による構文的展開を分析し、相互置換の可否及び副詞「せめて」「少なくとも」との関連性から考察したものである。その結果、「せいぜい」は 9 種の構文的展開があり、数量詞を伴う後接語が多い点から「最大限の見積もり」の意味が強く表れ、「せいぜい M (=Maximum: 話し手の主観による最大限の見積もり) だ／ない／だろう／下さい」とモデル化できた。「たかだか」は 7 種の構文的展開で使用でき、数量を伴う後接語もあることから「最大限の見積もり」の意味を有するが、「マイナス評価」を含む傾向があり、人の行為を述べる際には用いられにくく、モデル化は「たかだか M+NE (=Negative Evaluation: 話し手の主観的なマイナス評価) だ／ない／じゃないか」となった。「たかが」は特有の定型化された用法を有し、後接する語にさして数量詞を伴わないため、「見積もり」より「マイナス評価」が全面に表れ、話し手自身の自虐及び聞き手への非難から「たかが NE じゃないか／のに／のくせに」とモデル化できた。最大限を表すとされる「せめて」「少なくとも」はあくまで話し手の主観であったが、「せいぜい」「たかだか」「たかが」は話し手が聞き手を強く意識して、最大限やマイナス評価を伝える副詞であると結論付けることができた。

キーワード：日本語、副詞、せいぜい、たかだか、たかが

1. はじめに

日本語学習者がわからない語彙に出あった時、辞書を使って調べることが一般的であるが、必ずしも意味や使い分けが明確に判明するとは言いがたい。仲渡（2021：①②）では、最小限を表すとされる副詞「せめて」と「少なくとも」が、共に辞書では「at least」と記載されていることから、相違点を明確にするため、各々 100 用例を分析し、構文的展開を明らかにした上で相互置換の可否から、意味と用法の考察及びモデル化の提示を行った。

では、最大限を表すとされる副詞「せいぜい」「ただか」「たかが」はどうであろうか。『講談社カラー版日本語大辞典（第二版）』（1995：P 1179、P 1307、P 1309）では、

せいぜい①力の及ぶ範囲でできるだけ努め励む様。できるだけ。精一杯。at most

②多く見積もっても。ただか。at most

ただか①目立って高い様。②声の大きい様。

③多く見て。せいぜい。たかが。at most

たかが ①いくら高く見積もっても。せいぜい。ただか。at most

と、総じて「at most」と記載されている上、互いの意味が重複しており、日本語学習者にとって、使い分けが明確であるとは言にくい¹。

そこで、本稿では副詞「せいぜい」「ただか」「たかが」の差異を明らかにするため、各々の意味と用法の分析、考察を行い、日本語学習者への提示を目指すこととする。

2. 「せいぜい」「ただか」「たかが」の先行研究と問題の所在

「せいぜい」「ただか」「たかが」に関しては、「せめて」「少なくとも」と関連付けられるなど、さまざまな観点から研究がなされている。

工藤（1977：P 90-92）は、限定副詞の中で「少なくとも・せめて・せいぜい・ただか・たかが」を「見積り方・評価」と分類し、「せいぜい」「ただか」は「少なくとも」「せめて」とは逆に対象の語句を「最大限の見積り」として取りだすことを表し、対象を大したものではないとする「マイナスの価値評価性」が含まれると述べて

いる。しかし、「たかが」は「マイナス評価」そのものを表し、見積りではなく、既に確定した数値に対して評価を加えるとして、「せいぜい」「たかだか」は見積り、「たかが」は見積りではないとしている。ところが、工藤（2000：P 229-230）では「せいぜい」を「見積り」、「たかだか」と「たかが」を「評価」と捉え直している。森田（1989：P 583-584）は「せいぜい」は「できるだけ」と共通するが、ある限界内での努力を尽くすことであり、ある限界点があってそれ以上を希望しても無理だと諦める意識から、最高に見積ってもその限界値、悪くすればそれ以下という結果を見越した発想で、逆の発想は「少なくとも」だと述べている。また、「たかだか」は「どんなに多く見積もっても」という意識で「せいぜい」と共通するが、特に当人の努力を尽くすという前提はないとしている。西原（1991：P 69）は、言語使用者の「見積り」が主たる意味を形成している副詞として、「せいぜい」と「少なくとも」を「限定」に分類している。渡辺（1996：P 140）は「せめて・どうせ・いっそ・せいぜい・なまじ・さすが」などを日本語において生々しい主体的意義だけを明示的意義とする「評価の副詞」の一群とし、これらは日本語によって表される意義の世界と、外国語によって表される意義の世界とは、さまざまな点で違いあって当然だと述べている。

近年では安部（2005：P 283）が意味分析を行い、「せいぜい」「たかだか」は限度を表し、とり立てを有するが、「たかが」は「マイナス評価」を意味するとした。しかし、安部（2006：P 196）は「せいぜい」を意味用法の観点から、「できるだけ」の意味と「たかだか」の意味に分かれるとし、安部（2012：P 402）では「せいぜい」と類似表現の考察から、「たかだか」の意味を持つ「せいぜい」は「XはY程度だ」という程度化された表現と共起するとまとめている。また、向坂（2009：P 138）は「せいぜい」の用法変遷から、「せいぜい」は「できるだけ、精一杯」の意味、「たかだか」「たかが」の意味、「せめて」を有する意味の3種に分類できると述べている。さらに、林（2013：P 48-49）は「せいぜい」の意味変遷を考察し、「せいぜい」は「多くとも」であり、否定的なニュアンスを持つ。翻って「せめて」は「少なくとも」であり、肯定的な意味を持つとしている。

このように「せいぜい」「たかだか」「たかが」の分類は複雑な異なりを見せているが、共通項は「見積もり」「マイナス評価」「せめて、少なくともとの関連性」だと思われる。そこで、本研究では「せいぜい」「たかだか」「たかが」の例文において、構

文的展開を明らかにし、相互置換が可能かどうかという点から意味分析を行う²。また、「せめて」「少なくとも」との関連性についても考察する。

3. 調査の対象と方法

今回の調査は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-NT』の『中納言 コーパス検索アプリケーション』を用い、「せいぜい」「たかだか」「たかが」が含まれる文を、新聞、書籍、白書、広報誌、教科書より無作為に抽出し、各100例文の分析を行った。これ以下の例文は『中納言 コーパス検索アプリケーション』からの引用であるが、例文中の下線は筆者によるものである。

4. 分析と考察

4-1. 配置と後接する語

「せいぜい」「たかだか」「たかが」が文のどこに配置されているかを分析した結果、「せいぜい」は文頭14例、文中77例、文末9例で、「たかだか」は文頭18例、文中82例、「たかが」は文頭57例、文中43例であった。このことから「せいぜい」「たかだか」は文中に、「たかが」は比較的文頭に配置される傾向がある副詞と言える。また、「せいぜい」には文末という特有の配置が見受けられる。

さらに、具体的に何について言及する時に用いられるかを明確にするため、後接する語について分析を行った。結果を【表1】に示す。「せいぜい」は名詞80例中、「時間・期間」が最多で、「割合・量・人数・歳」など数量を伴う語が目立ち、動詞11例は動作動詞であった。「たかだか」は動詞がなく、名詞では「時間・期間」が最も多く、「距離・人数・歳」など数量を伴う語が後接する点で、「せいぜい」と共通点が見出された。「たかが」の動詞22例は「たかが知れている」という特定の用法であった。名詞78例中59例が数量を伴わない「その他」が後接し、「たかが」は人、物、場所、飲食物など幅広い事柄への言及が特徴的である。

【表1】「せいぜい」「ただか」「たかが」に後接する語

品詞	せいぜい	ただか	たかが
名詞（時間・期間）	5.6分、10年前後、6～7日、数世代、200年、3.4日、15年、1年、2年、1か月、30分、11～12世紀、6か月、5.6時間、5年、15分、5分(2)、一昼夜、50～60年間、10年間、数日間	100年(2)、2時間半、第一次石油危機後、3か月、12年、20年(5)、7.8年前、20年前(2)、30年(2)、8日、300年前、5分、10年、20分、7.80年、50年、数十年、200年、300年(2)、5年、3千年、百数十年	2時間、1日 1個、1冊、1本、1枚、1枚差、9千£、5万マルク、37.4℃、二両、1%、2.3枚 15.6人、1人(3)、5万、18
名詞（割合・金額・温度・量）	2000部、3冊～4冊、160日分、2.3割、一割四分弱、10% (2)、100\$、3.0、一杯、3個、30%、20万PG、一つ、700コルナ、900万、1.2万、200万円、2.3缶、千℃、一握り	10%、14%、21.8%、2.8km、2000t、一点、50台、250cc、200円、千百円、5万、500£、100万\$、2千万円、三千石、百点、一つ、12.3隻	ファッションビジネス、記念日、お笑い、画布、恋、町長、グリラ、幼稚園、取次、襟、オレンジジュース、話題、競馬、子供、臨時講師、帝王、人間、パーティ、ゴマ油、アジ、紙相撲、トカゲ、錦絵、同点、影、インスタント、ゴルフ、高利貸し、獲り手、真田家、子猫、人形劇、ビスケット、弁当屋の娘、見た目、鹿児島本線、人生、薙刀、爪、魔王、室長、水虫、サッカー、失敗、家の事、旅役者、仕事(2)、手帳、石、金と地位、名前、町奴、鍋、かりんとう、家、カーチャ
名詞（人数・距離・歳）	お一人、5.6人、人員2名に犬1匹、200、400、十人、12.3歳、35歳、21、5.6m、150フィート、20～30cm、数ヤード、1m、2～3km	1人、6人、1万(2)、3万、20人、二十数名、その程度的人数、4千、500万人、20代前半、数十m、m、40m、20cm、100m、50km、200m四方、数百km、	知れている(22)
名詞（その他）	抽象的なもの、駐車違反、アパート、詐欺とかサラ金、ポスター、減少傾向、健康、輸出国、屋根、鎌倉時代、本、味噌汁の具、発言、レベル、太陽熱温水器、息子、月、気休め、深浦、制度、輸送、そこまで	武者、欧州内、迷路、病気、方法、能力、雑鬼、コンプリケイティッド、自由思想、できること、レプリカ、間屋、可能態、人間、列、準一流、満足、こんなもの、会社、影法師、変遷、その程度のこと、その程度のもの、人気、関係、ランチ、主人の留守、規定、再定義、侍童風情、否定、女	
動詞	働く、寛ぐ、捕まえる、省ける、仕事をする、振り返る、利用する、気をつける、慎む、元気づける、お説教する		

4-2. 「せいぜい」の構文的展開

「せいぜい」では「肯定・現在」「否定」「推量」「文末」「過去」「命令」「依頼」「呼びかけ」「順接仮定」の9種類の構文的展開が認められた³。「せいぜい」「ただか」「たかが」の中では最も多い。

4-2-1. 「ただか」「たかが」と置換可能な構文的展開

【表 2】「せいぜい」の構文的展開 (1)

構文的展開	文型
肯定・現在	N は+N (期間) だ (4) / N で+N (期間) だ / +N (期間) / N でも+N (期間) 程度だ / V のは+N (時間) (4) / N に+N (時間) 程の N だ / V ても N は+N (時間) / N によるが+N (期間) / N は+N (量) だ (2) / +N (量) / V けれど+N (量) だ / N は+N (割合) だ (3) / N は+N (個数) だ (2) / N は+N (個数) を V / V ても+N (個数) の V / N は+N (距離) だ (3) / N は+N (距離) へ V / N は+N (距離) が N だ / N は+N (金額) が相場だ / +N (金額) が N / V が+N (金額) だ / +N (金額) だ / N は+N (人数) どもりだ / A てもまだ+N (年齢) だ / N は+N を V (2) / V、+N だ (2) / V ても+N だ / N の+N だ / N、+N は V / N は+N だ / +N が V だ / N は+N に V / N には+N だけが V / +N が V くらいだ
否定 (他排除)	N は+N (期間) にしか V ない / N から+N (期間) しか V ない / V のに+N (期間) しか V ない / まだ+N (期間) しかない / N が+N (距離) しかない / V ても+N (距離) しか V ない / V て+N (量) くらいにしか V ない / N は+N (温度) しか V ない / N は+N (金額) にしか V ない / +N しか V ない (2) / V か+N しか V ない
否定 (非重要)	N は+N (割合) にすぎなかった / N は+N (期間) くらいにしかすぎない / N は+N (人数) ほどにすぎず N ではない / V ても+N にすぎない / N は+N にすぎない

「ただか」「たかが」に置換可能と判断できる文は 65 例あった。【表 2】はその構文的展開と例文を文型化したものである⁴。各構文的展開を例文とともに分析する。

〈肯定・現在〉

- (1) せめてあんたが受け取る原稿料の半分はこちらにもらいたいと言ったんです。
ところが大東は笑って相手にしない。しまいには、おまえの書く原稿の価値はせいぜい一、二万が相場だと、小馬鹿にしたように言うじゃありませんか。

『京都・尾道れんが坂の殺人』谷川涼太郎著 (2004)

- (2) 会社から、引き続き嘱託社員としてどうだ、と話はあった。だが嘱託社員として残れる期間は、せいぜい五年である。還暦を過ぎてさらに五年間、まといつく

首のネクタイを辛抱しなければならない。 『定年後』中妻久夫著（1999）

文末が「だ」「ある」など「肯定・現在」を示すものは、「せいぜい」の構文的展開では最多で、48 例あった。そのうち 36 例は数量詞が後接する。文型は「せいぜい N（数量：期間、時間、量、割合、個数、距離、金額）（程度、どまり、相場、くらい）だ」となる。(1) (2) とともに最大限を見積もる「たかだか」に置換可能であり、「たかが」も置換可能であるとは思えるが、「マイナス評価」の意味が含まれ、侮蔑的な俗っぽい印象を与える文となる。

〈否定（他排除）〉

(3) ぶなの枝は「伸ばす」と言っても 1 シーズンにせいぜい二十～三十 cm しか伸びません。しかも、それだけ伸ばすと先芽から芽止まりしていきますから元芽は吹かずに眠芽となる確率が高くなります。 『雑木盆栽専科』米谷寿洋著（2004）

〈否定（非重要）〉

(4) もちろん、江戸時代に土蔵造りの店舗がなかったわけではないが、街並みの中で占める割合は、せいぜい二、三割にすぎなかった。明治中期になってはじめて、土蔵造りの街並みが出現したのである。

『江戸東京博物館』初田亨著（2003）

文末に「ない」を伴う「否定」は 17 例あり、12 例が数量に関する語に後接するが、2 種に分類できた。一つは (3) のような「せいぜい N（数量：期間、距離、量、温度、金額）しか V ない／しかない」の文型で、「あまり評価しない、価値が限定される」という「他排除」の意味を有する。もう一つは (4) の「せいぜい N（数量：割合、期間、人数）に（しか）過ぎない／かった」という文型で、「単に、あまり特別ではない」という話者の心象が表れる「非重要」である。「否定」であることから、2 種とも「マイナス評価」の意味が表れ、「たかだか」「たかが」と置換可能であると思われる。

4-2-2. 「たかだか」とは置換可能であるが、「たかが」とは置換不可な構文的展開

【表 3】の「推量」10 例は、「たかだか」とは置換可能であるが、「たかが」との置

換は判断が難しいと思われるものである。

【表3】「せいぜい」の構文的展開 (2)

構文的展開	文型
推量	V て+N (時間) であろう／+V て N (時間) くらいでしょう／N は+N (期間) くらいではなかろうか／N+N (人数) であったろう／N+N (割合) かな／N から+N (視力) だろうと V ていた／V ても+N とか N とか N ぐらいだろうと V ていた／N は+N くらいのものでらう／N では+N であろう／V、+N だろう

〈推量〉

- (5) 「おたくは風呂どうしてるの?」「うん? おれは姉んとこで入ってる。すぐそこに住んでるのよ、花木町」それは駅のすぐ向うだったので私はちょっと驚いた。歩いてせいぜい五、六分であらう。 『籠抜け天の電話』 夫馬基彦著 (2001)

- (6) ものを考えたり、何かをつくりだしたりという「人間の内なる働き」においては、本来、集中力を持続させることが難しい。せいぜい持続して一日のうちの五、六時間くらいでしょう。 『知的生活・楽しみのヒント』 林望著 (1998)

「あろう」「だろう」が文末にくる「推量」は6例が数量詞を伴う。文型は「せいぜい N (数量: 時間、期間、人数、割合) (くらい) だろう」である。(5) (6) 共に、最大限を見積もる「たかだか」には置換可能であるが、「歩いてたかが五、六分であらう」「たかが持続して…くらいでしょう」と「たかが」に置き換えると違和感を覚える。これは推量があくまで見積もりの予測であり、「マイナス評価」を含みにくいためだと考えられる。

4-2-3. 「たかだか」「たかが」とも置換不可な構文的展開

「たかだか」「たかが」共に置換不可と考えられる構文は【表4】の「文末」「過去」「命令」「依頼」「呼びかけ」「順接仮定」であった。「順接仮定」は1例しかなく、「せいぜい」で使用可能な構文と断言できないため、参考に留める。

【表 4】「せいぜい」の構文的展開 (3)

構文的展開	文型
文末	N が+だろう (2) / N では N が+だ / V のが+だ / N が+だ / V のが+であった / N が+であった / V のが+だろう / N でき V ぐらいが+だ
過去	N か+N (期間) 以内に V ていた / N から+N (期間) にも V た / N は+N (人数) だった / N は+N だった / N や+N が V た
命令	V から+N を V て、V / N は+N を V ことだ / +N を V て V なさい / V たら+V んだ
依頼	+N (人数) で V て下さい / +V てください (3)
呼びかけ	N で+V て、V ましょう / V+V ましょう
順接仮定	+V れば、V と N だ

〈文末〉

- (7) 遠野に着いても雨は続いている。駅前の案内所で詳細なガイドマップを貰うと側の喫茶店に入って検討した。この雨では市内巡りがせいぜいだ。曲り家で有名な千葉家やカップパ淵は翌日にまわす。『星の塔』高橋克彦著 (1992)

「文末」の 9 例は、文字通りまさしく文末に「せいぜい」が配置される特徴的な構文的展開である。数量を含む表現はないが、文型に肯定、過去、推量が見られ、「N が / V のがせいぜいだ / であった / だろう」とまとめられる。「たかだか」「たかが」は文末配置が見受けられないので、置換も不可であると言える。

〈過去〉

- (8) 業績悪化の中でトップが交代するのは IBM にとって初めての経験であった。これまでの IBM は新しい会長が生まれると、それと同時にせいぜい一年以内に、後継者たるべき社長が選ばれていた。

『IBM 帝国の凋落』飯塚郁郎著 (1993)

文末が「(てい) た / だった」の「過去」は、5 例中数量を伴う表現は 3 例で、文型は「せいぜい N (数量: 期間、人数) が V (てい) た / だった」となるが、「たか

だか」「たかが」に置換してみると、違和感がある。

〈命令〉

- (9) 「わかってますよ、社長」「言っておくが、これからは、せいぜい身を慎むこと
だ。金が入ったからといって、派手にばらまいたりすると、足がつくぞ」

『京都時代祭り殺人事件』和久峻三著（2004）

〈依頼〉

- (10) 「こんばんは。本当に光栄です。ありがとうございます」美紗もお辞儀した。
かなり緊張している様子である。「いいのいいの、せいぜい寛いで下さいな。ど
うぞ、ここに座って」

『月は幽咽のデバイス』森博嗣著（2003）

〈呼びかけ〉

- (11) 戦前・戦中のフィリピンにかんする研究も、このような戦略的観点からされ
たものがあり、今日でも役に立つものがあります。旧字で少し読みにくいものも
ありますが、日本語で書かれていますので、戦略的成果とは関係なくせいぜい利
用しましよう。

『歴史研究と地域研究のはざまで』早瀬晋三著（2004）

(9) のような文末が「する（ことだ）／しろ」の「命令」と (10) 「～て下さい」を
文末に伴う「依頼」は共に 4 例あり、文型は「せいぜい V ことだ／V 命令形／V な
さい」「せいぜい V てください」となるが、「たかだか」「たかが」には置換不可であ
る。文末が「ましよう」の「呼びかけ」は 2 例で数量詞はなく、「せいぜい V よう」
の文型となる。「命令」「依頼」「呼びかけ」のような動詞に係り、且つ他者への働き
かけとなる場合「マイナス評価」の意味を有する「たかだか」や「たかが」には置き
換えにくい傾向があると考えられる。

4-2-4. 「せいぜい」と「せめて」「少なくとも」との関連性

「せいぜい」と「せめて」「少なくとも」の意味・用法の関連性を明らかにするた
め、置換の側面から検討する。「せいぜい」の構文的展開のうち、仲渡（2021：①P
22、27）で「せめて」に認められたものは「肯定・現在」「依頼」「命令」「呼びかけ」
である。実際に置換してみると、(2)「だが囑託社員として残れる期間は、せめて五

年である（肯定・現在）」、(9)「これからはせめて身を慎むことだ（命令）」、(10)「せめて寛いでくださいな（依頼）」、(11)「戦略的結果とは関係なくせめて利用しましょう（呼びかけ）」となり、構文的には「せめて」に置換可能かもしれないが、話者の願望が表れる点で意味が異なってしまう、違和感を覚える。

仲渡（2021：②P 36、40）で「少なくとも」に見られた構文的展開は「肯定」「否定」「推量」「過去」である。(2)「だが嘱託社員として残れる期間は、少なくとも五年である（肯定）」、(3)「…1 シーズンに少なくとも二十～三十 cm しか伸びません（否定）」、(5)「歩いて少なくとも五、六分であろう（推量）」、(8)「…それと同時に少なくとも一年以内に、後継者たるべき社長が選ばれていた（過去）」と、こちらも「せめて」同様文型としては置換可能と言えるかもしれないが、最小限を見積もる意味となってしまう。「せいぜい」は話し手が聞き手より上の立場に立ち、聞き手を意識しての発話となるが、「せめて」は話し手の願望が含まれ、「少なくとも」は話し手の分析的思考が出る点で、聞き手はそれほど意識されておらず、話者心理に差異が表れると言える。

4-3. 「たかだか」の構文的展開

「たかだか」では「肯定・現在」「否定」「反論」「原因」「目的」「可能性」「逆接假定」という7種の構文的展開が認められた。

4-3-1. 「たかが」「せいぜい」と置換可能な構文的展開

「たかが」「せいぜい」と置換可能だと判断できる文は、93 例あった。【表 5】はその構文的展開である⁵。「肯定・現在」「否定」が大半を占める。「逆接假定」は1例のみのため参考に留める。

〈肯定・現在〉

(12) 人間、たかだか生きて百年。屋久島の杉は千年が単位である。日本の新石器時代が現われる前から、千年を七つ重ねてこの老樹は、ここに立ちつくし、人間の業の世界をみつめてきた。『老いが老いを看るとき』浅妻正美著（1997）

(13) 「君は私に職業上の信条を破れというんだな…」「信条を守るべきときもあるし、行動しなければならぬときもあるんです。聞いてください、先生！たかだ

か百万ドルですよ。遺産の総額から見れば塵のようなものだ」

『天才狩り』ソフィ・ガロワ著香川由利子訳（1998）

43 例中 29 例が数量を伴い、文型は「たかだか N（数量：期間、時間、人数、距離、金額、量）（くらい）だ／V（肯定形）」となる。（12）（13）とも話者が最大限を見積もっている点で、「せいぜい」と置換可能である。「たかが」も可能ではあると思えるが、話し手が「マイナス評価」だと判断している様子が表出する。

〈否定（非重要）〉

（14）いまは見慣れたものになったステンレス製の流し台は、たかだかこの三十年ほどのあいだに、私たちの前にあらわれたモノにすぎない。坐り式から立ち式へ、木製→人造石の研ぎ出し→ステンレス製へという、流しの移り変わりは、一見、水まわりの設備としての技術的な進歩にすぎないかのようにみえる。

『「モノと女」の戦後史』天野正子著（1992）

【表 5】「たかだか」の構文的展開（1）

構文的展開	文型
肯定・現在	+N（期間）だ／+N（期間）が N だ／+N（期間）の N は V／N+N（期間）／N は+N（期間）（2）／V のは+N（期間）だ（2）／N+V て N（期間）／N から+N（時間）だ／V のは+N（時間）くらいだ／N+N（時間）程度の N だ／N は N+N（時期）だ／N は+N（距離）だが A／N は+N（距離）に N を N／N にとっては+N（距離）のが V／+N（距離）とは V／N は+N（距離）から N ぐらいと V／N は+N（人数）だ（2）／N が+N（人数）で V／V+N（人数）だ／+N（金額）だ／+N（金額）とは N だ／V って+N（金額）だ／N は+N（量）（2）／N では+N（量）で N だ／V のは+N（割合）を V／V ても+N（点数）だ／V+N が V／+N が V（2）／N って+N（2）／A+N と V／N は+N すなわち N だ／V が+N だ／N とは+N だ／N が+N で V／V のは+N だ／+N に N を V

否定（非重要）	+N（期間）V にすぎない／V のは+N（期間）N にすぎない／N は+N（期間）に N にすぎない／V ても+N（期間）にすぎず N だ／N までも+N（期間）にすぎない／N は+N（期間）にすぎなかった／N が+N（人数）にすぎない／N+N（人数）にすぎなかった／V ても N は+N（人数）でしかない／N は+N（割合）にすぎない／V ては+N にすぎない／V のは+N にすぎない（2）／N は+N にすぎなかった（2）／+N にすぎなかった／N は+N して V にすぎない／N は+N を V にすぎない（2）／N+N でしかない
否定（他排除）	N は+N（期間）しか V ない（5）／+N（時間）には N すら V ない／N は+N（個数）しか V なかった／N によると+N（人数）しか V ない／N でも+N にしか V ないだろう／N は+N でしか V ない／N までも+N が N しか V ない
否定（その他）	N は+N（金額）を V ではあるまい／V+N（金額）で V ない／C+N（金額）を V ない／N だが+N（体重）を V わけにはいかない／V+N（割合）ぐらいの N が V ない
反論	V た後+N（人数）に対し N ではないのか／+N（人数）で V つもりか／+N（人数）に V か／N は+N（期間）の N なんだろう／N けど+N（期間）の N でしょう／N は+N あがりではないか／+N 程度にまで V のか／N、+N を V だけじゃないのか／N には+N か／+N を V だけじゃないか
原因・理由	N は+N（距離）ですので／+N（距離）ので V／C+N（時間）なので A／N は+N（個数）だったからだ
可能性	N は+N（期間）の N かもしれない／N は+N（期間）が V かもしれない
逆接仮定	N は+N（人数）で V ても、V ない

〈否定（他排除）〉

(15) 現代文明を今日のように花ひらかせた「科学」は、たかだか三百年の歴史しかもっていないのである。産業革命は大学を発達させ、大学は産業の勃興を引き起こすという循環が生まれ、科学を武器とした人類の文明は、時代が下るにつれ、雪だるま式に大きく膨れあがっていた。

『失われた「心の教育」を求めて』小杉隆著（1997）

〈否定（その他）〉

(16) 貸倒引当金を余裕をもって積むことができる大手からすれば、たかだか5万

円、十萬円の踏み倒しで、いちいち追い込みなんかはかけていられない。

『消費者金融誰もが驚く裏オモテ』井上トシユキ著（2003）

「～ない」を伴う「否定」は36例あり、23例が数量詞に後接する。これらは3種に分類できる。(14)の「非重要」は20例中10例が数量詞に後接し、文型は「たかだかN（数量：期間、人数、割合）にすぎない」、(15)の「他排除」は11例中8例が数量詞を伴い、「たかだかN（数量：期間、人数、個数）しかVない」という文型になる。「せいぜい」にも「非重要」「他排除」が認められた点からも、「せいぜい」に置換可能であり、「たかが」も「マイナス評価」の意味が強まるが、可能ではあると思われる。(16)のような「非重要」「他排除」以外に「ない」を伴う5例を「その他」としたが、全て数量を伴い「たかだかN（数量：金額、割合）を／がVない」となり、「せいぜい」「たかが」に置換しても、違和感はないと言える。

〈反論〉

(17)「なんと、揚州六郡より、総勢八万もの大軍とな？」侯観は、不気味な引き笑いを響かせた後、たかだか流民一万に対し、それは大袈裟ではないのかと、心にもないことを言う。

『中国遊俠伝』宇佐美浩然著（2003）

(17)のように文末が「～ではない（の）か」となる相手への「反論」は11例あり、5例が数量詞を伴う。文型は「たかだかN（数量：人数、期間）に／の／をN／A／V（ではない）（の）か」となるであろう。「反論」は話し手より地位が下、あるいは同等の相手を非難する場合に用いるため、「たかが」との置換に違和感はない。「せいぜい」には見受けられなかった構文的展開であるが、置換は可能であると言えるだろう。

〈原因〉

(18)台風の“目”の空間スケールはたかだか五十キロメートル程度ですので、その空間構造までをリアルに予測するには、現状の解像度（三百km）を大幅に高解像度化（三十～四十km）する必要があります。

『河川文化』丸山康樹著（2002）

「から」や「ので」を含む「原因」は数字を伴った4例があり、文型は「ただか N（数量：距離、時間、個数）（です／な）ので／から」となる。こちらも「せいぜい」には見られなかった構文的展開であるが、数量を伴うことから（18）を「せいぜい」や「たかが」に置換しても違和感は覚えない。

〈可能性〉

（19）一応、この見解にしたがうならば、利休の師は明らかに紹鷗であり、紹鷗の没後の十年ほどにすぎないから、先の『易は』とか、『利休云』とされた説は、ただか二十年ぐらいの間の利休の新説かもしれない。

『利休の茶花』湯川制著（1990）

「かもしれない」が文末にくる「可能性」の文型は「ただか N（数量：期間）の N/V かもしれない」となる。2例あり、共に期間を伴う。「せいぜい」には認められなかった構文的展開だが、「最大限の見積もり」と捉えると置換可能であり、「たかが」への置換も不可能ではないと思われる。

4-3-2. 「たかが」とは置換可能であるが、「せいぜい」とは置換不可な構文的展開

【表6】の「目的」4例は、「たかが」とは置換可能であるが、「せいぜい」は判断が難しいと思われるものである。

【表6】「ただか」の構文的展開（2）

構文的展開	文型
目的	N が+N（距離）で V ために V/N を+N（個数）の N のために V/N、+N（金額）を V だけのために V なんて A/+N のために V など N だ

〈目的〉

（20）逆に言えばテレビ並のスケールを、ただか一点の雑誌広告のために行ってもいたのだ。それらの基本にはもちろん絵柄のアイデアがある。私はなにかが気になる晩像をいくつも用意し、十文字さんがこれはいけるというまで二人で考えた。

『異端の資生堂広告／太田和彦の作品』太田和彦著（2004）

- (21) サムライが自殺するのは、よほどのことである。両親からもらった生命である。大切にしなければならない。たかだか病氣のために命を断つなど愚の骨頂である。これは桜の生涯より劣る。 『ヤング武士道』 田盛清隆著 (2005)

「～ために」を含む「目的」は4例中3例が数量詞を伴う。文型は「たかだか N (数量：個数、距離、金額) の／で／を N の／V ために V」となる。これは「せいぜい」では認められなかった構文的展開である。(20) のように数量を伴う例は「せいぜい」に置換できなくもないが、(21) のように数量を伴わない名詞が後接する場合は、違和感があり、不可だと思える。一方、(21) は「愚の骨頂」のように、「マイナス評価」の意味を有する表現があることから、「たかが」は置換可能であると思われる。

4-3-3. 「たかだか」と「せめて」「少なくとも」との関連性

「たかだか」についても、「せめて」「少なくとも」との置換について考察する。仲渡 (2021①：P 36、40／2021②：P 22、27) によると、「せめて」と「たかだか」に共通する構文的展開は「肯定・現在」「目的」であり、「少なくとも」と共通するものは「肯定・現在」「否定」であるが、2項目ずつしかないため「たかだか」に認められた構文的展開すべてを置換してみることとする。(12)「人間せめて／少なくとも生きて百年 (肯定・現在)」、(15)「…科学はせめて／少なくとも三百年の歴史しかもっていないのである (否定)」、(17)「…せめて／少なくとも流民一万に對し、それは大袈裟ではないのか… (反論)」、(18)「台風の目の空間スケールはせめて／少なくとも五十キロメートル程度ですので、… (原因)」、(19)「…説は、せめて／少なくとも二十年ぐらいの間の利休の新説かもしれない (可能性)」、(20)「…テレビ並のスケールを、せめて／少なくとも一点の雑誌広告のために行ってもいた (目的)」となり、総じて「せめて」は不可であろう。(12)「肯定・現在」のみ可能かもしれないが、話し手の願望が表れ、違和感が残る。「少なくとも」は共通する構文的展開の「肯定・現在」「否定」以外に、「たかだか」のみに見受けられた「反論」「原因」「可能性」「目的」も、文型だけをとり上げるのであれば、置換可能と言えるかもしれないが、話し手が最小限を主観的に見積もる意味となる上、聞き手に対するマイナス評価が表出しなくなる点で、「たかだか」とは話者心理に差異が生じてしまうと思われる。

4-4. 「たかが」の構文的展開

「たかが」では「肯定・現在」「反論」「目的」「禁止」「逆接」「非難」の6種の構文的展開が見受けられた。

4-4-1. 「たかだか」は置換可能であるが、「せいぜい」は置換不可な構文的展開

「たかだか」「せいぜい」両者と置換可能だと判断できる文は認められなかった。これは「たかが」特有の性質であろう。「たかだか」とは置換可能であるが、「せいぜい」とは置換不可だと判断できる構文的展開は、52例あった。「たかだか」「せいぜい」に比して、数量詞が含まれる文が少ない点も特徴的であると言える。【表7】はその構文的展開である⁶。

【表7】「たかが」の構文的展開（1）

構文的展開	文型
肯定・現在 A	+N（個数）だ（2）／+N（個数）で N だ／+N（期間）だ（2）／+N（人数）だ（3）／+N（金額）では A だ／+N（割合）だ／+N だ（5）／+N（3）／+N が だ／+N で V（2）／+N と V／+N で N だ／N は +N／C+N だ／V ても +N だ／V+N でも N だ／V が +N だ／C、+N
反論	+N（金額）ではないか／+N じゃないか（8）／N は +N じゃないか（2）／V ても +N じゃないか／V から +N じゃないか／C、+N じゃないか／C+N を V か／N でも +N じゃないか／V と +N じゃないか
目的	+N（人数）のために V／+N（個数）のためにと V／N は +N（温度）のために V／+N のためになぜ V のか／+N のために V か／V ても +N のために V

〈肯定・現在 A〉

(22) ナカタさんは少し考えてから、青年の好意を受けることにした。「ありがとう
ございます。それではご馳走になります」「たかがしけた食堂のアジと卵焼きだ。
そんなぺこぺこ礼を言われるほどのことじゃねえよ」

『海辺のカフカ』村上春樹著（2002）

「せいぜい」「たかだか」でも「肯定・現在」は認められたが、「たかが」では「肯定・現在」が3種見受けられたため、「たかが N（数量：個数、期間、人数、金額、

割合) だ／で V」となる文型を「肯定・現在 A」とした。29 例中数量詞に係るのは 10 例と半数以下であった。(22) は話し手の「マイナス評価」、さらには卑下という点で「たかだか」とは置換可能と思われるが、「せいぜい」とは置換可能だと判断することは難しい。

〈反論〉

- (23) 国語科主任は顔を赤黒くして黙りこんでいたが、ひとつ頭を振ってわめいた。
「君はたかが臨時講師じゃないか！ えらそうな口をきくのはやめたまえ。そもそも何の権利も資格も君にはないんだからな」
『創竜伝』田中芳樹著 (1990)

(23) のように「たかが N じゃないか」を文型とする「反論」は 17 例あり、数量詞は 1 例のみであった。「たかだか」の構文的展開にも「反論」は見受けられたが、「せいぜい」には見受けられなかったという点からも、前者は置換可能であるが、後者は難しいと言える。

〈目的〉

- (24) 「ーじゃ、恋もしたの？ でも一つまらないと思わない？ たかが男一人のためにーああでもない、こうでもないと気を回して、考え込んで、やきもきして、じりじりして、いやになったり喜んだりして、疲れちゃって、不眠症になったりして、勉強も手につかないとか色々あって…」
『探偵物語』赤川次郎著 (1982)

「目的」は 6 例中 3 例が数量詞を伴った。文型は「たかが N (数量：人数、個数、温度) のために V」となる。「目的」は「たかだか」の構文的展開にも認められ、「マイナス評価」を有する点からも「たかだか」には置換可能であると言えるが、「せいぜい」は構文的展開も見られず、従って置換も可能であるとは判断しがたい。

4-4-2. 「ただか」にも「せいぜい」にも置換不可な構文的展開

【表 8】「たかが」の構文的展開 (2)

構文的展開	文型
肯定・現在 B	+知れている／N は+知れている (3)／N は+知れていた／N も+知れている／N など+知れている (3)／N は+知れているものだ／N なんて+知れている (4)／V て+知れている／V ところで+知れている／V たら+知れている／V から+知れている (2)／N なんて+知れているじゃないですか／N は N+知れているではないか／どうせ+知れている
肯定・現在 C	+N されど N だ (11)
逆接	+N (時間) のに V／+N を V のに (3)／V が+N (人数) を V のに V／しかも+N を V だけなのに
禁止	+N (量) と言うなかれ／+N と言うなかれ (3)／+N と V な／+N で V な
非難	+N のくせに (2)／+N のくせに N だ

〈肯定・現在 B〉

(25) 最後に、男女を通じて、長生きするためのアドバイスをひとつ。これはとても簡単な方法。それでとっても長生きします。何を食えば何にいいとか、あんなことをやっていたって、たかが知れてます。 『夫と妻』永六輔著 (2000)

(25) のように「たかが知れている」という文型を「肯定・現在 B」とする。22 例中数量詞を含むものは見受けられなかった。「せいぜい」「ただか」共に「肯定・現在」は認められたが、「知れている」という動詞を含む例は見られなかった。従って、「たかが知れている」で一まとまりの文型と捉えられ、「たかが」特有の構文的展開であり、「せいぜい」とも「ただか」とも置換は不可能だと思われる。「大したことはないという程度がわかる、頑張ったところでいきつく先は予測できる」という話し手が上の立場から聞き手を見下す意味を有する。

〈肯定・現在 C〉

(26) 記念日を覚えていること。これは愛情の証です。女性が喜ぶことを、何か仕

掛けたい。これは男性の心配り、気配りです。この思いやりを示せるかどうかで、あなたへの恋愛度が判定できるのです。たかが記念日、されど記念日です。

『1 ヶ月以内に「いいこと」がたくさん降ってくる法則』安奈泉著（2005）

11 例ある「たかが N、されど N だ」の文型を「肯定・現在 C」とする。数量を伴う後接は認められなかった。「N を見くびる話し手の気持ちはあるが、だからといって N を全く評価しないわけではない、N は N なの価値がある」という意味を有する。こちらも「肯定・現在 B」同様「たかが」特有の構文的展開であり、「せいぜい」や「たかだか」には見受けられず、従って置換も不可であると思われる。

〈逆接〉

(27) 多感な少年時代に大人から話し方ではなく、話の内容に関してばかり指摘をされ続けていた私であった。しかもたかが昨日観たテレビの話題とかをしゃべっていただけなのにである。今の時代にこんな先生がいたなら、テレビのワイドショーのレポーターは放っておかないだろう。

『夜間通口』ナンシー関著（2001）

「たかが N を V（だけな）のに」を文型とする「逆接」は 6 例あり、数量詞を含むものは 2 例見られた。これも他では認められなかった構文的展開である。「逆接」は予想外の結果や食い違いに対する話し手の不満を含むので、「マイナス評価」が全面的に表出する「たかが」でのみ見受けられたと思われる。

〈禁止〉

(28) ゴマ油（1 瓶約二千ウォン）。たかがゴマ油というなかれ。韓国産のは日本のものと濃さが全然違う！香りも色もすっごく濃厚で、ゴマ好きの私は卒倒寸前。

『ハッピーソウル』岡田知子著（2002）

(28) のような禁止形を使った「禁止」は例あり、数量詞を含むものは 1 例のみ見受けられた。文型は「たかが N というなかれ/V（禁止形）」となろう。「せいぜい」「たかだか」では認められず、「たかが」特有であり、他に置き換えることは難しいと

思われる。

〈非難〉

(29)「なんですって…！？たかが護り手のくせに！」ぐしぐし別の問題でないというラエスリールをよそに、女は噛みつかんばかりの形相で闇主にわめきたてる。

『柘榴の影』前田珠子著（1991）

「非難」は3例あり、数量を伴う表現は見られなかった。「Nのくせに（Nだ）」の文型で、話者の聞き手に対する「マイナス評価」が強く表れることから、「たかが」のみに認められ、故に「せいぜい」や「たかだか」には置換が難しいと言える。

4-4-3. 「たかが」と「せめて」「少なくとも」との関連性

「たかが」についても「せめて」「少なくとも」との置換について検討したい。仲渡（2021①：P 36／2021②：P 22、27）から「せめて」と共通する構文的展開は「肯定・現在 A」「目的」、「少なくとも」と共通するものは「肯定・現在 A」のみであるため、「たかだか」同様すべてを置換してみることにする。(22)「せめて／少なくともしけた食堂のアジと卵焼きだ（肯定・現在 A）」、(23)「君はせめて／少なくとも臨時講師じゃないか（反論）」、(24)「せめて／少なくとも男一人のために一ああでもない、こうでもない…（目的）」、(25)「…せめて／少なくとも知れてます（肯定・現在 B）」、(26)「せめて／少なくとも記念日、されど記念日です（肯定・現在 C）」、(27)「せめて／少なくともゴマ油というなかれ（禁止）」、(28)「しかもせめて／少なくとも昨日観たテレビの話題とかをしゃべっていただけなののである（逆接）」、(29)「せめて／少なくとも護り手のくせに！（非難）」となるが、すべてにおいて違和感があり、置換は不可であると言える。特に(23)の「少なくとも」は、マイナス評価を含む反論ではなく、「最低限でも臨時講師なのだから、希望を持とう」のような話し手が持つプラス評価の意味に変わり、話者心理に異なりが生じてしまうと言える。

5. 「せいぜい」「たかだか」「たかが」の意味と用法

4. で分析した「せいぜい」「たかだか」「たかが」の構文的展開と置換の可否を踏まえ、各々の意味と用法について考察し、まとめたい。さらに「せめて」「少なくとも」との関連から見えてきたことにも言及したい。

「せいぜい」は主に文中に配置されるが、特徴的な文末配置も見受けられ、「肯定・現在」「否定」「推量」「文末」「過去」「命令」「依頼」「呼びかけ」「順接仮定」の9種の構文的展開が認められた。「時間、期間、割合、距離、量」などの数量詞を伴う後接が多い点から、その数量を限界とする「話し手の主観による最大限の見積もり」の意味が表れていると言える。後接する語に動詞が見られたことから、人の行為について言及する際に使い、森田（1989：P 584）の「最高に見積っても限界値という行為を見越した発想」と一致するが、「否定」の例からは「物／事の状態について述べる」場合にも使用可能であると言える。また、話し手が聞き手よりも常に上の立場であることを意識して発言しており、いわゆる「上から目線」の表現でもある。仲渡（2021②：P 47）では渡辺（2001：P 70）の「せめて」の「せめて Q (Quantity) ぐらいは希望したい」というモデル化に倣い、「少なくとも」のモデル化「少なくとも話者は M (=Minimum：最小限の範囲の主観的な見積もり) と思う」を提示した。今回も日本語学習者の習得の一助とするために提示するならば、「せいぜい M (=Maximum：話し手の主観による最大限の見積もり) だ／ない／だろう／下さい」となる。

「たかだか」は文中に配置され、「肯定・現在」「否定」「反論」「原因」「目的」「可能性」「逆接仮定」という7種の構文的展開が見受けられた。「せいぜい」同様「時間、期間、距離」などの数量を伴う名詞後接があり、「最大限の見積もり」の意味も有するが、話し手はその数量に「マイナス評価」を含ませる傾向が認められる。それ故、話し手は最大限だとは思っていないが、聞き手には最大限の見積もりとして伝わると考えられる。また、動詞の後接が見られないことから、人の行為を述べる際には用いられにくいと言える。モデル提示は「たかだか M+NE (=Negative Evaluation：話し手の主観的なマイナス評価) だ／ない／じゃないか／ので／ため」となる。

「たかが」は主に文頭に配置され、「肯定・現在」「反論」「目的」「禁止」「逆接」「非難」の6種の構文的展開が認められたが、「たかが知れている」「たかが N されど N」「たかが N と言うなかれ」など特有の定型化された用法も有する。後接する語にさして数量詞を伴わない点からも、「見積もり」より話し手の立場や役割に対する「マイナス評価」が全面に表出し、話し手自身の自虐及び聞き手への非難は、そこに話し手の自己満足的な攻撃性すら含まれると言えるだろう。モデル化は「たかが NE じゃないか／のに／のくせに」と提示できよう。

仲渡（2021：①）は「少なくとも」に置換可能かという観点から「せめて」における構文的展開を明らかにし、「話し手の願望」と「話し手自身の行為の実現に対する欲求＝自我」が文意に表れると結論付けた。仲渡（2021：②）は「せめて」に置換可能かという観点から「少なくとも」は、「主観的に話し手が最小だと思う範囲」で留まっており、「せめて」のような幅は持たないことを明らかにした。そして、今回「せいぜい・たかだか・たかが」を分析し、「せめて・少なくとも」との関連性から見えてきたことは、「聞き手に対する話し手の意識」であった。「せめて・少なくとも」は、あくまで話し手側の主観であり、聞き手はさほど意識されているとは言えない。しかし、「せいぜい・たかだか・たかが」には、話し手と聞き手の関係性が色濃く表れており、話し手は聞き手に対し最大限やマイナス評価を聞き手より上の立場から伝えることを強く意識した副詞であると言えよう。「せめて・少なくとも」「せいぜい・たかだか・たかが」は最小限、最大限という区別だけではなく、「話し手の主観」と「聞き手への意識」という視点もあるのではないだろうか。

6. おわりに

本稿において、「せいぜい」「たかだか」「たかが」各100例の例文分析を行い、各々に置換可能かという観点から構文的展開を明確に分類し、日本語学習者への一助となる用法のモデル化を例示することができた。さらに、「せめて」「少なくとも」との関連性から、「せいぜい」「たかだか」「たかが」には「最大限の見積もり」や「マイナス評価」だけではなく、「聞き手への意識」という観点もあることが明らかとなった。今後は他の見積もりや評価を表す副詞の分析も進め、それらの本質を追究していきたい。

注

- 1 『講談社カラー版日本語大辞典（第二版）』（1995）は、日常身近に接することば20万余語が掲載され、国際化時代に即し、語釈の末尾に英語が付けられ、日本語学習者向けでもあるという点で仲渡（2021：①②）でも採用した辞典である。
- 2 構文的展開とは渡辺（2001：P 73）に倣い、文型的構文を機能別に名付けたものである。
- 3 構文的展開は一例文に必ずしも一種ではなく、二、三種含まれるものもあった

が、その場合は修飾部分を取り上げ、構文的展開と判断した。また分類は『教師と学習者のための日本語文型辞典』（1998）に基づくものである。

- 4 表中の「+」は「せいぜい」、N は名詞、V は動詞、A は形容詞・形容動詞を表す。
- 5 表中の「+」は「たかだか」、N は名詞、V は動詞、A は形容詞・形容動詞、C は接続詞を表す。
- 6 表中の「+」は「たかが」、N は名詞、V は動詞、A は形容詞・形容動詞、C は接続詞を表す。

参考文献

- 安部朋世（2005）「セイゼイ・タカダカ・タカガの意味分析」『千葉大学教育学部研究紀要』第53巻 pp.279～284 千葉大学
- 安部朋世（2006）「副詞セイゼイの意味・用法と『とりたて』の在り方」『現代日本語文法—現象と理論のインタラクション—』pp.193～214 ひつじ書房
- 安部朋世（2012）「副詞セイゼイと類似表現の考察」『千葉大学教育学部研究紀要』第60巻 pp.401～406 千葉大学
- 林禎映（2013）「副詞『せいぜい』の意味変化—近代語を中心に—」『日本語学論集』第九号 pp.190～208 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 梅棹忠夫他監修（1995）『講談社カラー版日本語大辞典（第二版）』講談社
- 工藤浩（1977）「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』pp.969～986 明治書院
- 工藤浩他（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』pp.163-234 岩波書店
- 工藤浩（2016）『副詞と文』ひつじ書房
- 砂川有里子他（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 仲渡理恵子（2021：①）「副詞『せめて』の意味と用法」『三重大学国際交流センター紀要』第16号 pp.17-32 三重大学国際交流センター
- 仲渡理恵子（2021：②）「副詞『少なくとも』の意味と用法」『同志社大学 日本語・日本文化研究』第18号 pp.29-49 同志社大学日本語・日本文化教育センター
- 西原鈴子（1991）「副詞の意味機能」『副詞の意味と用法』pp.51-80 国立国語学研究

所

- 日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館書店
- 飛田良文・浅田秀子（2018）『現代副詞用法辞典 新装版』東京堂出版
- 向坂卓也（2009）「副詞『せいぜい』の用法変化」『言語コミュニケーション文化』第7巻1号 pp.129-143 関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- 森田良行（2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 渡辺実（1996）『日本語概説』岩波テキストブックス
- 渡辺実（2001）『さすが！日本語』ちくま新書

例文出典

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-NT』大学共同利用機関法人
人間文化研究機構国立国語研究所